

1・2歳児の自発的な遊びを支えるための援助のあり方について¹⁾西 垣 直 子¹⁾Regarding the Approach of Nursery Teachers to Support
the Voluntary Activities of Children between 1 year to 2 years old

Naoko NISHIGAKI

子どもの成長のための自発的な遊びの重要性や、その遊び自体が継続し満足感のあるものになるための保育者の援助の重要性については言うまでもない。しかし1・2歳児に於てはその発達の特徴によって、保育者自身の関わりの根拠を探ることは難しく、適切な関わりが難しい事態も起こりがちである。本研究では事例検討により、自発的な遊びを支えるための保育者の役割とその関わりの持つ意味を明らかにした。その結果、子どもの意識や行動には連続性が存在するという前提に立って場面を捉えることで、関わりのあり方を導き出し易くなることが分かった。また、保育者自身が子どもにどのような願いを持って関わるかを意識して思考することで関わりの根拠が明確になり、子どもの実態に沿った関わりが可能となることなどが分かった。

キーワード：1・2歳児 保育者の関わり 遊びへの援助 関わりの意味

はじめに

平成27年4月から子育て支援新制度が施行され、保育所・幼保連携型認定こども園・幼稚園型認定こども園・特定地域保育事業は施設数、利用児童数共に増加している。そしてそれは1・2歳児の利用児童の増加が大きな要因で、平成30年4月時点での1・2歳児の保育所等利用率は当該年齢の就学前児童数の47%となっている。保育の量の確保が進み多くの1・2歳児が保育施設での保育を受けるようになってきた今、保育現場では3歳未満児の保育に携わる保育者の数の確保が難しくなっている。それ故、経験の少ない臨時採用保育士、パート保育士が3歳未満児の保育に多く携わるようになってきており、初めて3歳未満児を受け持つ若い正規職員保育士が、クラス運営のリーダーを担うケースも珍しくない現状がある。

ところで、保育所保育指針解説に「乳児から2歳児までは、心身の発達の基盤が形成される上で極め

て重要な時期である。また、この時期の子どもが、生活や遊びの様々な場面で主体的に周囲の人やものに興味をもち、直接関わっていかうとする姿は、『学びの芽生え』といえるものであり、生涯の学びの出発点にも結び付くものである。こうしたことを踏まえ、3歳未満児の保育の意義をより明確化し、その内容について一層の充実を図った。」(厚生労働省、2018、p4)とあるように、保育所保育指針においては3歳未満児の保育の質の向上が求められ、保育現場でもその必要性が今まで以上に強く認識され始めている。しかし、身近に模範を示してくれる経験豊富な先輩保育者に恵まれにくい保育現場の現状では、経験の少ない保育者は、保育所保育指針で語られる考え方は理解できても、3歳未満児の学びの芽生えにつながる関わりの具体的なイメージは持ちにくいと予測される。

短大を卒業したばかりのある1歳児の担任保育者が、次の様なことを話していた。「子どもの世話の仕方は、やり方を教えてもらってできるようになっ

1) 短期大学部幼児教育学科

てきた。しかし、子どもが何をして遊んでいるのか分からないと、どう関わればよいのか手が出ないこともある。」と。この様に悩みながらも、保育に携わる者は子どもの健やかな育ちに結びつくような保育のあり方を模索しているのが現状である。

1. 研究目的

保育の目標を達成するために留意すべき事項の一つとして、保育所保育指針には「子どもが自発的・意欲的に関わられるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にする。特に乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。」(厚生労働省2018、P5)と保育の方法について定められている。乳幼児にとって遊びは、主体的に周りの環境に関わってその子の発達に必要な体験を得る大切な場である。それは3歳以上児であろうと3歳未満児であろうと変わることはない。しかし3歳未満児の生活においては、遊びと生活習慣形成、生理的欲求を満たす部分が混然一体となっているという特徴があり、また、発達上の特徴から、大人にとっては子どもの行動は把握しづらく、子どもの行動の意図するものが捉えにくい傾向がある。

1歳児の遊びと、そこに関わる保育者の特徴として、西垣は「1歳児期は目の前で展開する事象に行動を左右されやすく、一見とりとめもない行動が続く時期と捉えられがちである。そのため、まだ経験の浅い保育者にとっては、めまぐるしく変化していく子どもの姿や何をしているか捉えきれない姿に、どのように関わってよいのか戸惑う場面も必然的に多くなる。また経験を積んだ保育者であっても、目の前で起きる様々な事態への対処に追われて、自分自身の関わり方の根拠についての読み取りが追いつかず、感覚的に子どもに関わっていかざるを得ない場面も多い。」(西垣、2019、日本保育学会第72回大会発表論文集、pP-1175)と捉えている。2歳児においては、自我の発達によりモノや場の取り合い、思いを言葉で表現できないもどかしさから起きるトラブルによって遊びが中断したり、保育者自身がトラブルの対応に追われたりして、遊びの中で子どもが経験しているものを保育者が十分捉える余裕がなくなる場面も多い。子どもの成長の場として自発的な

遊びが非常に大切で、その遊び自体が継続し、子どもにとって満足感のあるものになるよう援助したいと思いつつも、子どもの発達と保育者自身の関わり方の根拠についての整理がつけられない場合、保育者は上手く関われなかったという感覚を持つのではないだろうか。

そこで、本研究では子どもの自発的な遊びにおける保育者と子どもとの関わり場面を抽出して、保育者の具体的な関わり方の背景や根拠を考察することで、子どもの発達を保障するために1・2歳児担当保育者に求められる、自発的な遊びを支えるための役割とその関わり方の持つ意味を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

(1) 資料の収集と分析

- ① 保育園において1・2歳児の自発的な遊びの場面を映像にて記録する。事例採取後保育に関わった複数の保育士と共に事例検討を行い内容を記録する。
- ② 経験豊富な保育者が子どもに関わっている事例を選択し、映像から記録を作成する。そして、保育士の具体的な関わり方のあった場面ごとに次の観点で、保育園の保育士との事例検討の内容を交えて考察する。
 - i 保育士の表情、行動、言葉から感じられる保育者の心の動き・意図を捉える。
 - ii 具体的な関わり方が子どもにどのような影響をもたらしたか。子どもの内面の動きや行動の変容から捉える。

(2) 倫理的配慮

本研究の事例の採取と検討にあたって、研究協力園の責任者に研究目的を説明した上で実施し、事例使用の許可を得た。なお、プライバシー保護のため、本論文での保育士、幼児の名前は仮名としている

3. 事例と考察

【事例1】1歳児 2017年8月22日 午前10時～11時 G県K市A園 保育歴10年目の保育士B
朝から機嫌が悪かったA男は保育士に①抱っこを

せがみ水遊び用のたらいのそばまで連れて行ってもらった。たらいのそばで降りると、A男は落ちていた透明な乳酸菌飲料空き容器とピストル型水鉄砲を見つけ、乳酸菌飲料容器に水をすくい入れ、それを水鉄砲にはめ込もうとした。ピストル型水鉄砲に水タンクがついていたことを覚えており、乳酸菌飲料容器を水鉄砲の透明タンクと間違えてはめ込もうとしていたのだ。②それを察したB保育士は水鉄砲のタンク差し込み口を指さして、乳酸菌飲料容器に入っている水を「ここに入れて。」と促した。A男は乳酸菌飲料容器に水をすくっては水鉄砲に入れ始めた。入れにくそうなので、③B保育士が水鉄砲に手を掛けて支えている。A男は差し込み口をのぞき込みながら真剣な表情で何度も水を入れ続ける。しばらくして④B保育士は水鉄砲を支えていた手を放してみる。しかしA男が無言で水鉄砲をB保育士の方に突き出してきたので、再び水鉄砲を持つ。そしてA男がたらいの水を乳酸菌飲料容器に汲んでいる間、⑤水鉄砲の引き金を引いて2、3度水を飛ばしてみる。A男は水を汲んだ後、B保育士の手から水鉄砲を取り水を入れる。⑥その時B保育士は水鉄砲を支えていない。次にA男は水鉄砲の引き金を引いてみる。最初はうまく水が飛ばなかったが、⑦B保育士がちょっと手を貸すと突然水が出て、A男の頭の上から水が降ってきた。⑧びっくりしつつも笑ってB保育士を見るA男。B保育士に少し助けをもらいながら何度も引き金を引いて水を飛ばし始めた。B保育士も笑う。水が遠くまで飛び、⑨A男は水が飛んだ軌跡を示すかのように指を動かして空中に弧を描く。その仕草をB保育士も一緒に行う。そこにC子がやってきて、A男が水を汲んでいたたらいの中に座り込んで水しぶきを上げる。⑩B保育士はさりげなくC子を抱えてたらいから出す。たらいから出たC子にもA男の水鉄砲の水がかかってC子も笑う。そのうちA男は水が飛んでいった方向にあるフェンスの外の川を眺め「ないねー」と言う。⑪いつも川の中州にいる白鷺がいないことを伝えたのだと察したB保育士は「いないね。」と共感し、しばらく一緒に川を眺めた。C子も一緒に眺める。⑫B保育士は川を眺めている二人を残し、その場から離れた。

その後A男はフェンスの隅に枯れ葉がたまっているのを見つけ、拾ってたらいの中に入れた。水の中

の葉を見ていると他の子が寄ってきて、葉っぱを触り始める。そこへ⑬B保育士がやってきて、別のたらいの水をA男の見ていたたらいの中に移し替えた。すると水の流れができて、水中の葉がたらいの中を回り始めた。それを見てA男はさらに手で水をかき回し始めた。周りの子もかき混ぜ、水流で葉が回る。子ども達はそれを喜ぶ。たくさんかき混ぜたら、水がはねてA男の顔にかかった。A男は舌を出し顔を押しさえ、「えへっ」と笑って近くにいた保育者の顔を見る。みんなは葉をかき混ぜては眺めているが、A男はその後、一人立ち上がって再び枯れ葉を拾って来てたらいに入れた。⑭B保育士は「A君が入れてくれたのね。」と声をかける。しばらく葉をかき回して遊んだところで片付けの時間になった。B保育士は⑮「葉っぱのプールになったねえ。」と言って、そのたらいを片付けず、隣にあった大きいたらいにおもちゃを入れて運び始めた。それを見たA男は遊びをやめ、周りの子ども達と一緒に大きいたらいを持ち上げて一生懸命運び始めた。たらいを運んでいた子どもは順に手を放していつの間にかなくなったが、A男はたらいを最後まで運び、おもちゃを根気よく片付けて保育室の方に戻っていった。

<事例1の考察>

機嫌が悪かったA男は遊び終わる時間には活気を取り戻し表情も柔らかくなっていた。そして片付けをする姿からは満足した様子が感じられる。これは自分のしていたことを理解してもらい、自分が見つけた遊びを通して充実感を味わったからだろう。また、子どもの気持ちが満たされるためには、遊びへの意欲の基盤となる「安定感」をもたらし関わりが必要となり、その上で遊びが継続されるように、楽しさを実感する場面を作ったり困難を軽減したりする具体的な援助が必要であることが読み取れた。また、1歳児の興味・関心は小さな表情や仕草の変化に表れることも多く、子どもが自分で見つけた楽しさを感じ、如何にその楽しさを膨らませていけるかが、その子の満足感につながると思われる。

具体的には事例中の下線①～⑪の場面を通して、子どもが自分で遊びを見つけ、満足感を味わうための保育者の関わりのあり方を導き出した。

下線番号	子どもが自分で遊びをみつけ、満足感を味わうための保育者の関わりのあり方
①	子どもに安心感と周りの物に目を向ける気持ちの余裕をもたらし、遊びたくなる気持ちを高める。
②	やってみると楽しくなりそうなことを提案する。
③	まだ身体の機能が十分でない子どもが、難しさ、やりにくさによって遊びをあきらめてしまわないように、共に遊びながら補助する。
④	子どもが自分の力で行動し始めたら、保育士の直接的な補助をさりげなく控えていく。また、子どもの様子を観察しながら補助の具合を調整する。
⑤	共に不思議がったり喜んだりして、子ども自身が自分で遊びを見つけたことに喜びが感じられるようにする。
⑥	子どもの動作、視線の動き、発する音声に同調して保育士も同じように動くことで、子どもに、共感してもらう喜びやしていることを肯定される満足感を実感させる。
⑦	その子のしたいことが満足いくまで継続できるよう、他の子どもの突然の介入などによって遊びが壊れないように近くで見守り、必要な援助を行う。
⑧	子どもの気持ちが安定し、したいことが見つけられそうな状態の時は、物理的に少し距離を置きながら、子どもがどんなことに興味を持ち、試し始めるのか、温かい雰囲気を作って観察する。
⑨	子どもの楽しんでいることが継続し、さらに楽しい展開が起きることを期待して、子どもの見つけたちょっとしたことを膨らませて、楽しい遊びに変化させる様な投げかけを行う。遊びの場の環境に保育士の手を加えてみることも含まれる。
⑩	大人からすると些細な行動であったとしても、子どもが自分で考えて行ったことを言葉にして認める。その子の発想が楽しさを招き、さらに楽しさに惹かれて周りの子どもも楽しく過ごせたことを保育士が大いに喜んでいることが伝わるようにする。
⑪	遊びや子どもの行為に名前をつけ、遊びの場を大切に扱う。このことにより、子どもは自分が行っていることを意識化でき、さらに自分の行為を肯定的に捉えられるようになる。

【事例2】1歳児 2017年8月22日 午前10時～11時 G県K市A園 保育歴15年目の保育士D

カップに水を汲んでD保育士の方に持っていくE男。D保育士は両掌でカップの水を受けた。すると⑫E男は片手をD保育士の掌の中に入れかき混ぜるような仕草をする。D保育士は「くちゅくちゅくちゅ」と言葉を添える。E男は次に手を当ててD保育士の掌をひっくり返し、水を外にあげる。D保育士は「じゃー」と言葉を添える。そこにF子が来てD保育士の掌にバケツから水を入れ、手を出そうとしたが一旦引っ込め、しかし、やはり手を出して水をかき混ぜた。⑬D保育士は笑顔で表情豊かな口調で「くちゅくちゅくちゅ」と言う。するとF子は、E男と同じように保育士の掌を逆さにして水をあげる。それを見ていたG男も同じように行う。子ども達は何度も同じことを繰り返す。途中で⑭バケツの

取り合いになったが、D保育士がすぐに違うバケツを持ってきて、どちらを使うのか取り合いになった二人に尋ね、すぐに解決した。子ども達は何度も何度もこの遊びを繰り返した。

＜事例2の考察＞

子ども達とのやりとりの中でのD保育士の行為は、遊びに簡単な決まり事を作り、決まり事があることで、子ども達はそれに則って遊びを繰り返す楽しさを味わったように感じる。保育士の特徴ある言葉や動作が、子ども達の簡単な決まり事への理解を促したのではないか。同時に、特徴ある言葉や動作は不思議さや楽しさを産み出し、数人の子どもを同じ場に集める役割を果たしたと考えられる。

具体的には下線⑫～⑭から、遊びを継続させ、楽しさを高める関わりのあり方を導き出した。

下線番号	遊びを継続させ、楽しさを高める関わり方
⑫	子どもの行為を受けて保育士と子どもとで簡単な決まり事を作ることによって遊びに流れができる。保育士が行為を擬音で表したり、特徴的な動きをすることで、それが、子どもが決まり事を感じたり作ったりするきっかけとなる。
⑬	物や言葉と同時に保育士の表情を子どもに受け渡し、楽しさや不思議さを醸し出す。これは、周りの子どもがこの行為に目を向けるきっかけとなる。
⑭	繰り返しの中で生まれる遊びの楽しさを子どもが感じ取れるよう、物や場所の取り合いといった、思いの表現や伝達ができないために起きるトラブルを、1歳児にも分かるように目に見える形で解決に導き、遊びを継続させる。遊びを継続させることは、子ども同士の関わりを生じさせることにもなる。

【事例3】 2歳児 2019年5月24日 午前10時～11時 G県M市B園 保育歴39年目の保育士G

場面1

園庭の隅にある土山には、直径30cmほどの浅い穴があいていた。①G保育士は子ども用バケツに1杯、水を汲んできて穴に入れた。乾燥して硬くなった土は子どもの力では掘りにくいから湿らせようと思ったそうだ。するとH子とI子がやってきてシャベルで穴の中の土をこね始めた。水が少なくなったので子どもに求められて、G保育士はまた子ども用バケツに1杯の水を汲んできた。

そこに1歳児がやってきて、H子達が遊んでいる穴の中に入った。②G保育士は1歳児の顔を見て「あ」と言ったが、その動きを制止しなかった。肩に1歳児がつかまったが、G保育士は1歳児に特に関わることなく、I子に話しかけながら土を掘っている。③その時H子が1歳児の足を押した。G保育士は1歳児に手を伸ばして助けようとするが間に合わず、1歳児は尻餅をつく。1歳児は泣くことなくそこに座り込んだので、G保育士は1歳児の体をなでて、起こすことはなくそのままにして、再びH子、I子のそばで穴を掘り始めた。

するとH子がおもむろに立ち上がり、泥んこの穴の中に入り始めた。1歳児もまた立って泥に入った。H子は泥に足を取られ、履いていた靴が泥にはまって足が抜け、靴下に泥がつく。H子はちょっと困ったような表情になる。④G保育士は慌てる様子無くH子の手をもって支えながら、「靴がはまっちゃった、靴がはまっちゃった。助けてよIちゃん。」と言う。I子が手を止めて立ち上がり、「ちょっと待ってね。」と言いながら泥の中からH子の靴を

引っ張り出す。もう片方の靴はG保育士に支えられながらH子自身で泥から引き上げた。そしてH子は座り込んで靴と靴下を脱いだ後、その場に靴も靴下も置いたまま園庭にいた園長先生の所へ行き、泥だらけの手を見せた。それからH子は裸足のまま砂場へと移動して遊び始めた。

<場面1の考察>

場面1は子ども自身が目の前の環境に興味・関心を示し、そこに自発的に関わりながら自分なりに色々試している場面と言える。まだその環境の面白さを十分に感じ取っていない遊び初めの頃は、突発的な出来事によって子どもの遊びへの意欲が失われかねない不安定さがある。場面1では異年齢の子どもの登場や靴が泥に取られるといった突発的な出来事が起こっている。

1歳児が遊びの場にやってきた場面で、保育者は1歳児を、その場で遊ぶ子どもの一人としてH子達と同じように受け入れている。異年齢の子どもが場を同じくする場合、力関係の違いから安全面には十分配慮が必要であり、3歳未満児では言葉や自己コントロール力の未熟さから、叩いたり押したりという行動が予測される。ここでは2歳児への安全面への投げかけがもう少し必要だったかも知れない。しかし、大げさにしないことでH子も1歳児も遊びを続けることができたとも考えられる。

靴が泥に取られるといった遊びの中で起きる予想していなかった出来事は、遊びの中断に繋がる事がある一方、遊びの発展のきっかけになることもある。従って、一見トラブルに思われることであっても困った出来事だと捉えず、その出来事が子どもにとって意味ある経験になることを願って、具体的

な手立てを瞬時にしかも冷静に判断することが必要となることが分かる。

具体的には下線①～④から、次の4項目の遊び初

めの段階で必要な遊びを支える関わりのあり方を導き出した。

下線番号	遊び初めの段階で必要な遊びを支える関わりのあり方
①	子どもが関心を持って遊ぼうとしても、2歳児の力ではうまくいかず興味を失ってしまうこともある。興味を持った環境に子どもが進んで関わっていけるよう、抵抗感を減らす配慮が必要になることがある。
②	子どもが物的環境、人的環境にどの様に関わっていくか見通しがつかない状態では、状況の変化があった場合、それを把握しながらも過敏に反応せず、子ども自身がどの様に関わっていくのか注目し、意識しながら見守る必要がある。
③	押したり、叩いたといったトラブルへの対処が大げさ過ぎると、当事者両方共の気持ちが切り替えられなくなり、遊ぶ気持ちが削がれ、関心事への興味が失せてしまうことも多いので、場合に依じて、ちょっとしたいざこざには過剰に反応しない判断も必要となる。
④	保育士が冷静に行動することで子どもの動揺を減らす事ができる。また、困ったことが起きた場合、周りの子どもに投げかけるなど、解決方法の多様性が求められる。

場面2

H子が立ち去った後、すぐにJ男とK男が土山にやってきて泥んこの中を歩き始めた。どうもH子達の様子を他の場所から見ていたようだ。J男は何回も足踏みをしてから穴から出た。⑤大きな靴跡がついたのを見てG保育士が「あははは」と笑う。⑥K男が「J君のあんよになった。」と言い「えいえい」と声を出してはしゃぐ。G保育士は「ほら、J君のあんよになったって。こんなに大きいよ。」と靴跡をシャベルで指す。「こんな大きい」とK男が繰り返して言い、K男も泥の中に靴跡をつけ始めた。するとJ男が再び泥の中を歩き始め、二人で穴の端から端まで歩くことを繰り返す。しばらくすると⑦J男が「あいよ」とかけ声を発する。G保育士が「あいよ」と合いの手を入れ、J男が「あいよ」と応える。J男が泥から出るとK男も「あいよー」と言ってから泥から出る。

I子もやってきて、「ジャンプー、ジャンプー。」とかけ声を掛けながら泥の中で両足跳びをしながら進んで行く。「ジャン」といいながら穴から跳びだそうとしてI子はバランスを崩す。⑧G保育士は「あー」と大声をたてながら助けに行くが間に合わず、I子は泥の中に尻餅をついて起き上がれなくなる。G保育士は大きな声は出さずに笑いながら、I子の腕をもって引っ張ろうとする。するとI子は尻餅をついたまま両足を挙げ、にっこり笑ってしばら

くそのままにいる。G保育士は「そーれっ！そーれっ！」と言いながらI子を引っ張り、I子は立ち上がる。「たいへんなことになったね、Iちゃん。」とG保育士はにこにこしながら言葉を掛ける。起き上がったI子は再び同じように泥の中をジャンプで進み慎重に穴から出て、端っこで振り返って「見て。」と靴跡を指さし、「私のあんよ」と言う。

その後J男、K男、I子は列をなし何回も何回も穴の中を歩いて靴跡をつけて遊んでいる。⑨G保育士が「J君のあんよだって」と靴跡を見て言うと、K男は足下を見ながら何度も土を踏んで「ほーらKのあんよになった」と応える。I子も「ほら、私のあんよー」と指さす。「あんよあんよー」等互いに声を出しながら3人は歩き続ける。⑩土が踏まれて固まり、靴の跡がつかなくなってきたので、G保育士はシャベルで掘って土をぐちゃぐちゃな状態にする。一人が「ぐちゃぐちゃ」というと誰かが真似して言い、一人が腕を振りながらリズムカルに歩くと他の子も同じ歩き方になり、3人は何度も何度も泥に靴跡をつけて、「これJ君のあしー」「これKのあしー」「私のあしー」と繰り返す。

<場面2の考察>

2歳児は生活に慣れてくると、面白そうなことをしている子どものいる場に集まっていく傾向があり、遊びに参加する子どもが入れ替わりながら遊び

が続いていくことが良くある。場面1でH子は他の場所へ移動したが、土山での出来事を見ていた子ども達が、泥に靴の跡がつく事を面白がって新たな遊びが始まる場面である。興味を持った事を繰り返し楽しむ子どもの行為を、保育者が表情、言葉、態度等様々な手立てで認める事で、子ども達は遊びの面白さを実感し自己肯定感を高めていったようだ。そして、2歳児なりに思考しながら遊びを継続する様子が見られた。「ぼくのしていることは素敵なこと

なんだ。」「楽しいからもっと続けたいな。」という子どもの意欲に繋がる保育者の援助が見られた。また、場を同じくする子ども同士のつながりをもたらし役目も保育者は果たしている。

具体的には下線⑤～⑩から、次の3項目の遊びへの意欲を高める関わりのあり方と、2項目の場を同じくする子どものつながりをもたらし関わりを導き出した。

下線番号	遊びへの意欲を高める関わりのあり方
⑤	子どもの行為について、保育士ははっきりと言葉で返しているわけではない。しかし、愉快そうに笑い声を立てること自体が、子どものしている行為を認める意味を持つ。それと同時に笑いが楽しい雰囲気をもたらしことになる。
⑥	子どもの発した特徴ある言葉を受けて、同じ言葉を用いて会話をつなげることにより、子どもは自分の発想への認めとして受けとめることができる。
⑦	子どもの発した掛け声のリズムにのって応答することで、同じ場で遊ぶ子どものわくわく感を高め、遊びを継続させるエネルギーのようなものを生じさせている。
⑧	3歳未満児で頻発する遊びが中断しそうな出来事が発生した場合、保育士が穏やかに明るい態度で接し、子どもの自身が気持ちを立て直す支えとなって、遊びを続けていこうとする意欲を持続させる。

下線番号	子ども達のつながりをもたらし関わりのあり方
⑨	子ども達が始めた遊びを見守りながらも、時々子どもの言葉を借りて、子ども達の楽しんでいる行為を改めて意識させるような言葉を掛ける。これによって、場を同じくする子どもが、互いに影響し合いつながりができていく。
⑩	遊びが続くに従い、遊びの場の状態は変化する。遊びの楽しさが実感しにくくなると関心が薄れやすい2歳児の場合、保育士がこまめに環境の再構成をして、意欲の持続を支えることも必要である。

場面3

10分ほど続いたところで、⑪K男が「今度お水入れて」とG保育士に頼んだのをきっかけに、G保育士が「ちょっと待ってて、じゃあお水汲んでくるわ」と水を汲んできた。水を入れた土山の穴の中は泥がかなり柔らかくなった。3人の子ども達はいつの間にか靴と靴下を脱いで裸足で土を踏んでいる。園長先生が近くに来て、⑫「I子ちゃん達も脱いだの。最初から脱いだ方がよかったかも知れないね。」と言う。G保育士は「そうしようかとも迷ったのだけど、靴跡がつくのを楽しんでいるうちにこうなったんですよ。」と答える。

J男が「もじょもじょ」と大きな声で言うと、K

男も「ものもの。このもの」と言い、それを受けてJ男が「こものの」、K男が「このもの」と言葉を発して楽しむ。さらにI子が「冷たいなー」と言うとK男も「冷たいなー」と同じような口調で言い、J男は首を振って歩きながら「冷たいなー」とまた同じ口調で言いながら土山の上を歩く。そして穴の中に「じゃぶん!」と言って入ったとたん「あー気持ちいい」と大きな声で言う。⑬G保育士は「ははっ」と笑った。

⑭J男は「ねえ、もっと水やって。水」と言い出した。G保育士は「ちょっと、先生ね・・・」と言葉を濁す。それから。「わかった。じゃあ、汲んでこよう」と言って、緑色のバケツをJ男に渡し、自分

は白いバケツをもってホースのつないである水道に向かった。それを見たI子とK男は穴を飛び出して小走りでG保育士を追い、K男はG保育士の持ってきた白いバケツに水を汲んで運ぶ。J男は緑のバケツを放り投げて、G保育士とは違う方向にある砂場遊具置き場に向かう。そしてJ男は茶碗を持って水汲み場に現われた。茶碗に水を汲んで土山に運ぶ。それを見たK男は同じ茶碗を持ってきて水を運び始めた。J男は「入れちゃった。」と言いながら土山の穴に水を流す。K男も「入れちゃった。」と言いながら水を流す。J男が「もう一回入れてくる。」と走り出し、K男も「もう一回入れてくる。」と同じようにする。2人は何度も同じ事を繰り返す。I子も茶碗で水を汲み運ぶ。¹⁵G保育士はその間、ずっと水汲み場において、ホースから直に容器に水を入れる手伝いをしたりタライに水を汲んだりして、水を運ぶことはしなかった。J男とK男は茶碗の次に穴の空いているじょうごやふるいに水を汲んだり、皿に持ち替えたりして水をくみ続けた。

<場面3の考察>

時間経過と共に子どもの楽しみ方が少しずつ変化し、子ども達からの要求に保育士はどう応えると良いのか迷う場面も出てくる。子どもに水を要求される場面が2回あるが、似たような要求なのに下線部

11と14では保育士の対応が異なっている。遊びが面白くなっていけばよいという単純な願いではなく、子ども達が何を経験すると良いのかと考えながら判断しているので対応が異なってくると思われる。2回目に子どもから水を要求されたG保育士はしばらく考えてから子ども自身で水を汲むように誘導している。このことによって遊びの流れが大きく変わり、子ども達は2歳児なりに行動の目的をもって試行錯誤する経験をする事となった。保育士の関わり方によって子どもの経験が変わってくることを意識し、関わり方に迷った場合は、「今子ども達に何を願っているのか。」「今、目の前の子どもにとってふさわしい経験とは。」という判断基準に従って子どもに対応する事が大切だと考えられる。

また、下線12からは、この保育園ではそれぞれの保育士によるとらえ方の違いや気付きを常に伝え合うようにしていることが分かる。保育後、この時の保育について語り合うことになるのだが、保育について話し合える職員関係が構築されると、他者の意見をきっかけに自分の関わりの根拠を振り返る機会を得ることができる。経験豊富な保育士であっても保育カンファレンスは日常的に必要であることがわかる。

具体的には下線11～15から、発達に応じた経験に繋がる関わりのあり方を導き出した。

下線番号	発達に応じた経験に繋がる関わりのあり方
11	子どもの要求を保育士が満たすことで子どもの意欲が高まり遊び方に変化ができ、そこでまた豊かな経験が展開されると瞬時に判断した場合、保育士は子どもの要求通りの援助を試みる。一方で14のような判断も必要となる。
12	他者の感想や意見を受け止めて考えることで、自分の行動の根拠を確認している。直接的な子どもへの関わりではないが、目の前の事象への対応に振り回されそうになる中で目の前の子どもの発達や子どもへの願いを思い出しての関わりの継続に効果的である。
13	子どもは保育士の態度や表情によって、自分の行動への肯定感を実感するようだ。時々保育士の感覚を表情で表す事が大切だと考えられる。
14	3歳以上児に比べて3歳未満児には、子ども自身の力でできないことが多いので、保育士は子どもの要求をそのまま受け入れてやってあげようとすることが多い。しかし、2歳児は子どもの発達や遊びの様子によっては、子どもが求めるまま保育者がやってあげて要求を満たすのではなく、具体的な手立てを工夫することにより、子ども自身が行いながら結果的に子どもの要求が満たされる方法もある。その具体的手立てを考えて子どもに投げかけるのが保育士の役割である。
15	自分でやりたいという要求の高まってくる2歳児では、子どもなりに課題を持って集中して行動している時には保育士の動きを押さえ、見守る関わりが結果的に子どもの思考や行動を促すことに繋がる。

場面 4

3人が水を汲んで運び続けて10分ほど立った頃、G保育士は水を汲むのをやめて子どもと一緒に土山に戻ってきた。¹⁶J男が「ねえ、やってみて」といってG保育士を軽く押して顔を見ながら促したので、G保育士は「じゃあ裸足になるわ、私も。」と答え、裸足になって泥の中に入る。G保育士が靴を脱ぐのを3人子どもは待って、一緒に泥に入る。子ども達は「いえー」と言いながら歩き、J男が「これはいいや。」とG保育士を見ながら笑顔で言う。¹⁷G保育士も「これはいいや」と言う。その後しばらく4人は列をなしてはしゃいだ様子で泥の上を歩き回っていた。突然J男が「あかたい。こっち。あかたい。」と言う。¹⁸「あかたい？ あったかい？」とG保育士が応え、「ここ暖かいね。日が当たっているから。」「すごいね。」と、独り言のように言う。しばらくすると、同じクラスのL子が裸足になって近寄ってきて、じっと様子を見ていた。K男が「Lちゃんもやる？」と声を掛ける。I子も「入ってみる？」と誘う。L子は手を後ろに組んでしばらく見ていた。¹⁹G保育士はぐちゃぐちゃの泥をL子の目の前で何回も足踏みして踏んで見せた。L子は近づいて

きて、足を少し泥の方に差し出したが、結局やめて振り返って行ってしまった。G保育士はL子の行方を目で追ったが、何も言わなかった。そして給食の時間が来て片付けが始まり、G保育士は子ども達に声を掛けて落ちている砂場遊具を片付け始めた。

<場面 4 の考察>

十分に自分達の好きな遊びに取り組んだ子どもは、その場にいる人とも満足感を共有しようとする。子どもの思いに共感する関わりが大切だと言われるが、ここでは具体的にどうすれば子どもの思いに応えられるだろうか、保育士自身の子どもへの共感が伝わるだろうか工夫する保育者の姿が見られる。そして子どもと同じ体験をすることで保育士は子どもの内面の動きをより理解し、子どもの成長とその子の素敵な面を実感して喜びを感じる事になる。また、子ども自身の見つけた遊びや楽しい経験は、同じ年齢の子どもに興味・関心に結びつきやすいため、他の子どもへも、環境面からの働きかけを試みる事ができる。

具体的には下線¹⁶～¹⁹から、子どもの思いや行動に共感する関わりのあり方を導き出した。

下線番号	子どもの思いや行動に共感する関わりのあり方
¹⁶	言葉だけでなく、実際に保育士が子どもと一緒に体験する姿は子どもにとって肯定感を強く感じる事になる関わりだと言える。
¹⁷	子どもの言葉を受け、加えて保育士の思いを的確に表す短い言葉を発することで、子どもの楽しさに一層共感できる。遊び全体を通して、子どもの短い言葉を受けて返す関わり方が繰り返し行われている。
¹⁸	保育士の感じた子どもの素晴らしさを、頭の中で理解するだけでなく言葉にして表現している。大げさに褒め称えることで遊びが中断することもあるという配慮であろうか、さりげなく、しかし子どもに届くように確実に認めていく関わりを行っている。
¹⁹	子どもの始めた遊びをその子達だけの遊びで終わらせるのではなく、同年齢の子どもの発達を促す環境にひとつとして取り扱い、また次の機会へと繋がっていくよう、子どもの実態を把握する姿である。この姿は評価反省を次の活動に生かす保育計画立案の一環とも捉えられる。

4. まとめ

本検討を通して、1歳児の子ども達の自発的な遊びを支えるための関わりについては、保育者が次のことを意識することによって、具体的な関わりの手立てが導き出しやすくなることが明らかとなった。

- (1) 具体的な関わりに至るまでの子どもの様子や保育者の思いが絡まって、ひとつの関わりが生まれてくること。
- (2) 1歳児の育ちや現状を深く捉え、保育者自身が今、子どもにどの様な願いを持つべきかという思考が求められるということ。

(3) 1歳児は行動の脈絡をつかむことが難しい時期ではあるが、その中でも子どもの意識や行動には連続性が存在するという前提に立って場面を捉えたと、思考のつながり、周りの人とのつながりなど、様々なつながりを生み出すきっかけができること。

(4) 子どもの行動そのものを引き出す関わりと同時に、気持ちの安定や楽しく心地よい状態を作る関わりが大切であること。

2歳児への関わりにおける基本姿勢は1歳児への関わりと同じであるが、2歳児の発達の特徴を踏まえて、次のような関わりのあり方が大切であることが明らかとなった。

(5) 自分で決めて自分の方法で行いたいという欲求が高まってくる2歳児においては、保育者が遊び方を示すといった直接的な支えに加え、子どもの興味や関心を高める環境への関与といった間接的な支えが遊びの意欲に繋がる。さらに、遊びが続いていくと環境を再構成する関わりが必要になる。

(6) 周りの子どもと同じ場で遊ぶ、同じことをして遊ぶ、一緒に遊ぶ、トラブルになる場面が増えるため、友達の存在が遊びをより楽しくし、トラブルがあってもまた気持ちを切り替えて遊びが継続できるということを理屈ではなくて感覚的に実感させる関わり方が大切である。

(7) 遊びの継続時間が発達と共に長くなっていくので、子どもの行為一つひとつにその都度反応を返す関わり方は1歳児より減り、保育者の投げかけに子どもがどの様に反応するか確かめてから再度関わったり、遊びの経過を把握してから関わるといった2段階での関わり方が増えていく。

(8) 子どもの関心と意欲を支えるには、子ども自身の行為への認めや自己肯定感が必要となる。言葉での理解が進んでいく2歳児の発達を踏まえながらも、言葉だけに頼らない、表情・態度・雰囲気・行動で、子どもの発想や遊びに取り組む姿への認めを工夫した関わりが必要である。

事例を考察する中でもう一点確認できたことがある。保育者一人が考えているだけでは子どもの捉えや事象の捉えに広がり生まれにくい。従って子どもへの関わりの具体的な方法、あるいは関わりの柔軟性が乏しくなるのではないだろうか。それを回避するためには、保育を共に語る保育者仲間の存在が必要であり、保育の中で気軽に声を掛け合い、保育者自身の思いを語る雰囲気を作る試みも広い意味で、子どもの遊びを支える関わりとなるだろう。

今後、ここで明らかになった、保育者の子どもへの関わり行動の意味や発達による関わりの特徴を念頭に置きながら、現場での職員研修において事例検討を重ねていきたい。保育現場の3歳未満児担当保育者、特に経験の少ない保育者が子どもに関わる際の具合的なイメージの構築につながるよう、現場研修でのカンファレンスに活用したいと考えている。

注1) 本研究は日本保育学会第72回大会(2019)で発表されたものに修正・加筆したものである。

< 引用文献 >

厚生労働省 2018 「保育所保育指針」 p.5

厚生労働省 2018 「保育所保育指針解説」 p.4

西垣直子 2019 日本保育学会第72回大会発表論文集、p.1175